

間」25.6%で前回から変更はない。

このことは大学の先生とどれくらい接していますかとの問いにも現れている。ここでもやはりゼミナールの先生と接することが一番多く、続いて言語の先生、学部の先生と続いているが、ゼミナールの先生は6段階中2.99と約半数を占めていた。

学生の諸活動での情報収集手段ではインターネットやスマホなどの携帯端末の利用が進んでいる。趣味や遊び、また、知らない場所を探す場合は8割近くの学生がまずネット等で情報収集をしており、レポート課題やレポートで行き詰ったときも約5割の学生が活用している。ただし、試験に関する情報については友人や先輩・先生を情報ソースとしている傾向がある。

次に諸活動におけるコミュニケーション手段については「直接会って話す」が過半数をしめているが、友人とのコミュニケーションでSNSを使う率が上がっており、それに対応して携帯・スマホのメールの割合が減少しているようである。

ここで、教員との接する機会に関連して、外国人の教職員との接する機会についてみると、全体としては「たまに接している」32.7%、「日常的に接している」11.4%で合計44.1%に対し、「まったく接していない」26.9%、「ほとんど接していない」29.0%と半数以上が外国人との接触を持っていないことがわかる。その中で学部別にみて総合政策学部や国際学部は多くなっており、それらは留学生や外国人教員の比率が高いなど環境的なものが多く作用していると考えられる。グローバルを推進している本学としては対応していかなければならないところである。

これら調査から見える学生はまず大変真面目に授業に出席をして単位を積みかさねており、やはり就活に向けての体制作りが本能的にも定着していると思われる。

特に今回からGPAとの関連をみてみたが、GPAの高い学生ほど真面目に授業に出席しておりそれが成績に反映していることが証明できている。また、彼らが重要視しているもののトップにゼミナールを挙げており、大学生活の大きな意義のひとつとしてゼミ活動に求めているようである。これは大学において接している教員の中で、ゼミの先生が大きな割合を占めていることからもうなずける。

なお、今回からGPAとの関係もみていくことになるが、カリキュラム改革や大学での学習環境などを充実させていく上で継続してみていく必要があるだろう。

3. 目的意識・価値観および適応

(1) スクールモットー・使命の理解と認知度 (Q8)

スクールモットーと関学の使命への認知度に関しては、今回、初めて行う調査項目である。

まずQ8-1で「あなたはスクールモットー“Mastery for Service”の意味を理解していますか。」と問い、その回答結果を図3-1-1に示す。「よく理解している」27.7%、「まあまあ理解している」56.6%は、全体で84.3%であった。

「よく理解している」+「まあまあ理解している」の合計を学部別にみると多い順に、神学部100%、国際学部97.7%、人間福祉学部91.0%、総合政策学部89.0%、教育学部87.0%、商学部86.8%、法学部85.2%、経済学部85.0%、社会学部80.0%、文学部78.5%、理工学部74.4%であった。一方、「まったく理解していない」1.7%「あまり理解していない」14.0%は、全体で15.7%であった。

国際学部、人間福祉学部、教育学部はいずれも他学部と比較して歴史が浅いにもかかわらずスクールモットーの理解度が高いのは、教職員による貢献が奏功しているのではないかと考えられる。

男女別に「よく理解している」+「まあまあ理解している」をみると、男性83.7%、女性84.6%で、わずか0.9ポイントではあるが、女性の理解度が高かった。

入試形態別では、スポーツ能力に優れた者を対象とした入学試験、または特別選抜入学試験(スポーツ活動)による入学生が「よく理解している」53.1%で、全体平均27.7%を大きく上回っている点が際立った特徴である。

課外活動団体に所属しているかどうかでの比較では、所属している学生で「よく理解している」は30.2%、所属していない学生は21.1%で、所属している学生のほうが9.1ポイント高かった。「まあまあ理解している」と合計すると、所属している学生は85.4%、所属していない学生は81.2%だった。

次にQ8-2で「あなたは関西学院が『“Mastery for Service”を体現する世界市民』の育成を使命としていることを知っていますか」と聞いた。回答結果を図3-1-2に示す。全体の78.6%が「知っている」と回答している。

学部別では、「知っている」の全体平均78.6%を上回っているのは、社会学部82.1%、法学部

Q8-1. あなたはスクールモットー“Mastery for Service”の意味を理解していますか。

- | | | | |
|---|-------------|---|------------|
| 1 | まったく理解していない | 2 | あまり理解していない |
| 3 | まあまあ理解している | 4 | よく理解している |

Q8-2. あなたは関西学院が『“Mastery for Service”を体現する世界市民』の育成を使命としていることを知っていますか。

- | | | | |
|---|-------|---|------|
| 1 | 知っている | 2 | 知らない |
|---|-------|---|------|

85.2%、総合政策学部82.7%で、国際学部に至っては100%の回答率であった。

全体に高い数値が出ているなか、理工学部の「知っている」62.2%、「知らない」37.8%が少々気がかりである。

入試形態別では、「知っている」の全体平均78.6%に対して帰国生徒入学試験で入学した学生は33.3%と大きく下回っている。実数は3名と少ないこともあるが、このような各種入試制度こそが本学のスクールモットーを周知する機会であると考えれば認知度は100%であってもよいと考えられる。

課外活動団体に所属しているかどうかでの比較では、所属している学生は80.2%、所属していない学生は74.5%で、所属している学生のほうが5.7ポイント高かった。

図3-1-1 スクールモットーの理解 (Q8-1)

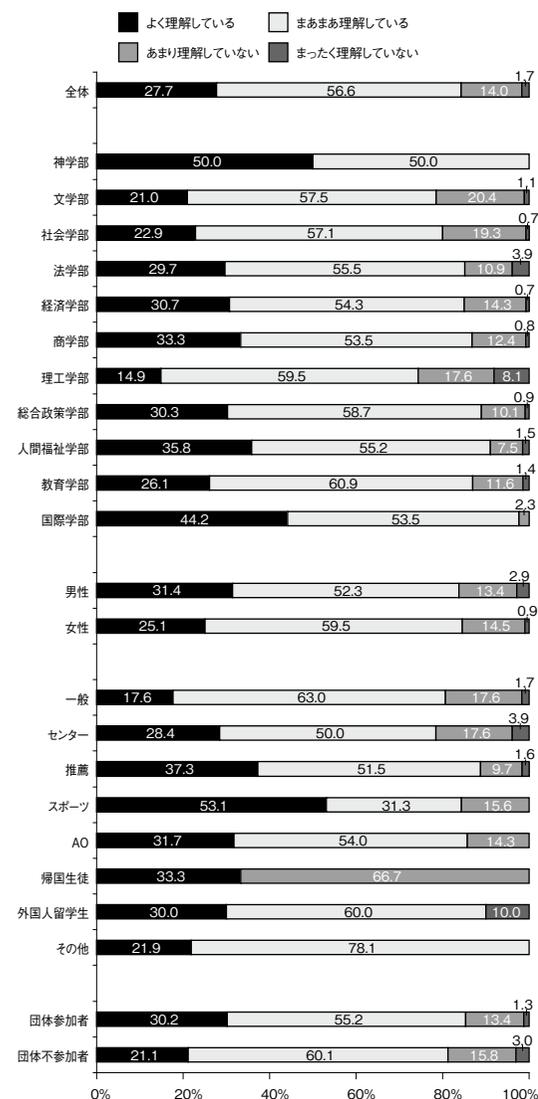
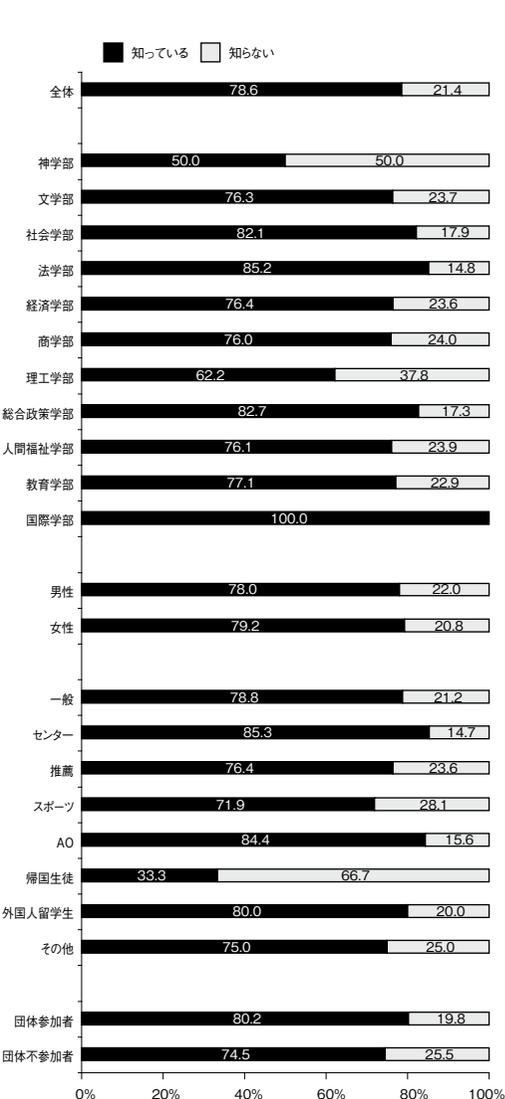


図3-1-2 Mastery for Serviceの使命 (Q8-2)



(2) 在学中に身につけたい知識や能力 (Q4)

Q4では、「在学中に身につけたい知識や能力」について、「一般的な教養」「専門知識」「外国語運用能力」「ITスキル」「プレゼンテーション能力」「ディベート能力」「コミュニケーション能力」「その他」から2つまで選択してもらった。回答結果を図3-2-1～図3-2-8に示す。

多く選ばれたのは「一般的な教養」(44.1%)、「専門知識」(41.7%)、「コミュニケーション能力」(40.0%)、「外国語運用能力」(33.3%)、「プレゼンテーション能力」(22.7%)の順となり、少なかったのは「ITスキル」(5.1%)、「ディベート能力」(7.0%)の順である。

学部別に回答のもっとも多かった選択肢は、文学部は「一般的な教養」(55.2%)、社会学部は「コミュニケーション能力」(48.1%)、法学部は「専門知識」(56.2%)、経済学部は「コミュニケーション能力」(47.8%)、商学部は「専門知識」(43.2%)、理工学部は「専門知識」(58.9%)、総合政策学部は「プレゼンテーション能力」(43.8%)、人間福祉学部は「専門知識」(55.6%)、教育学部は「専門知識」(69.1%)、国際学部は「外国語能力」(81.0%)と、それぞれの学部教育の特徴を反映した結果となった。

学年別では、「一般的な教養」は多い順に、3年生(49.8%)、4年生(46.6%)、2年生(44.4%)、1年生(37.2%)、「外国語運用能力」は多い順に、1年生(43.9%)、2年生(32.8%)、4年生(28.0%)、3年生(26.4%)となっている。他の項目については、学年による大きな差異はない。

また、性別では、男性が「専門知識」(45.4%)「一般的な教養」(41.6%)「コミュニケーション能力」(41.6%)「外国語運用能力」(29.2%)と回答したのに対し、女性は「一般的な教養」(46.0%)「専門知識」(39.0%)「コミュニケーション能力」(38.8%)「外国語運用能力」(36.2%)だった。「一般的な教養」「外国語運用能力」は、女性の方がそれぞれ4.4ポイント、7.0ポイント高く、「専門知識」「コミュニケーション能力」は男性の方が6.4ポイント、2.8ポイント高かった。

GPAや入試形態、住居、団体所属別においても、ほぼ、「一般的な教養」「専門知識」「コミュニケーション能力」「外国語運用能力」が上位を占めている。

Q4. あなたが在学中に身につけたい知識や能力を2つ以内で選んで○印を付けてください。

1 一般的な教養	2 専門知識
3 外国語運用能力	4 ITスキル
5 プレゼンテーション能力	6 ディベート能力
7 コミュニケーション能力	8 その他 ()

図3-2-1 身につけたい知識や能力(全体)(Q4)

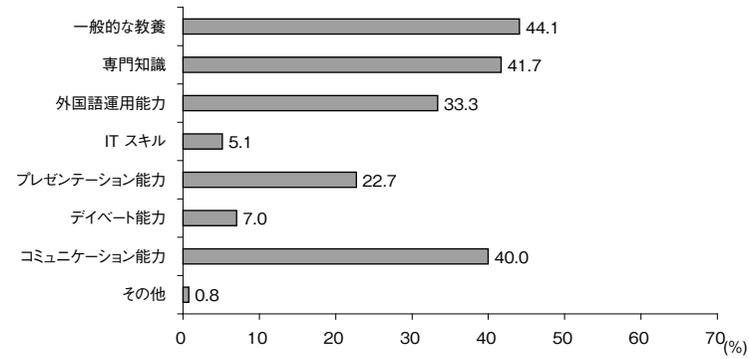


図3-2-2 一般的な教養(Q4)

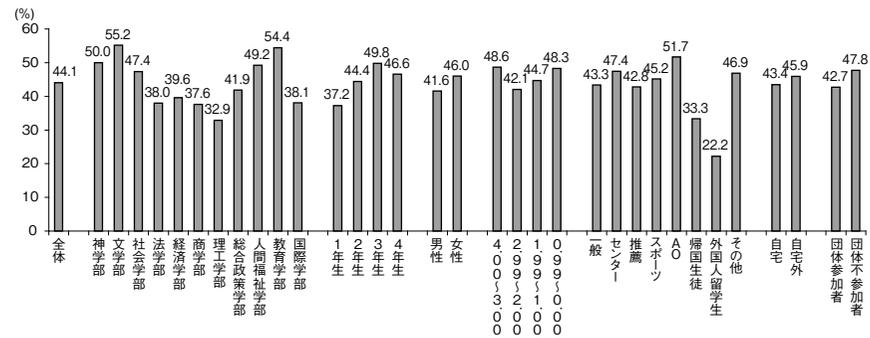


図3-2-3 専門知識(Q4)

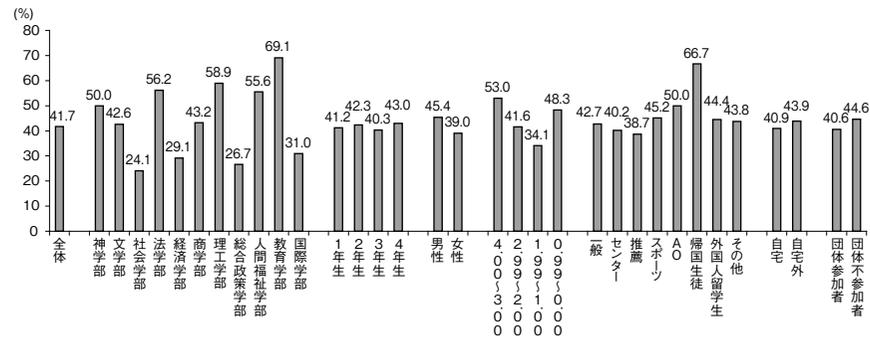


図3-2-4 外国語運用能力(Q4)

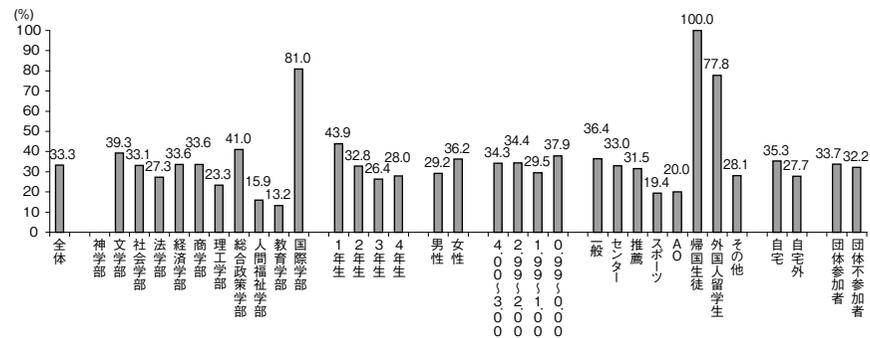


図3-2-5 ITスキル(Q4)

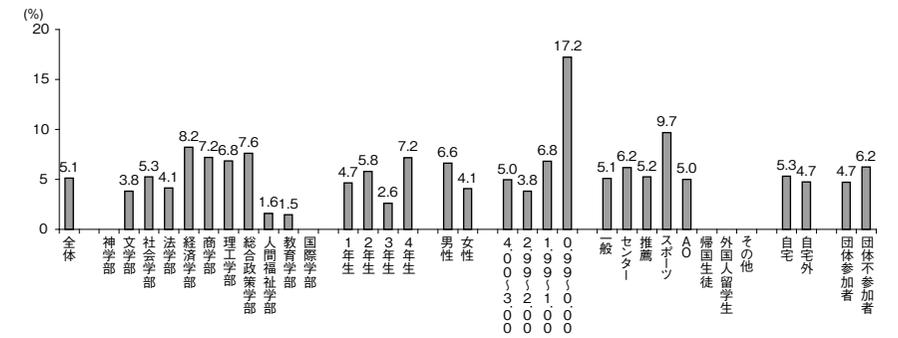


図3-2-6 プレゼンテーション能力(Q4)

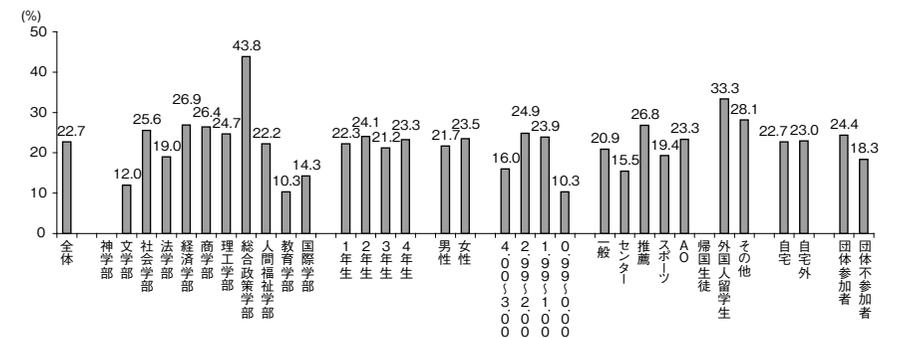


図3-2-7 ディベート能力(Q4)

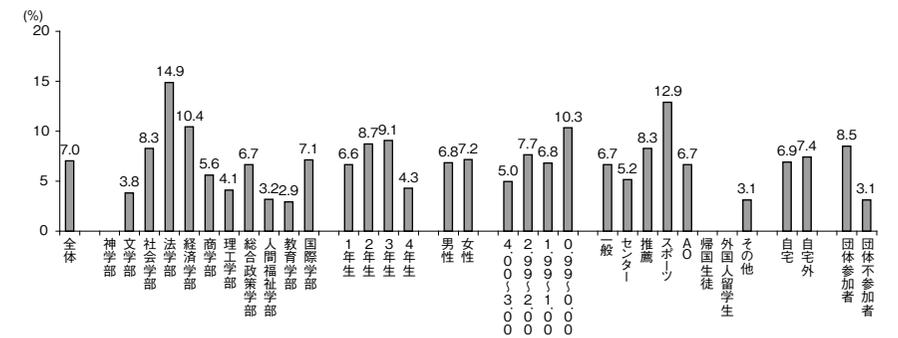
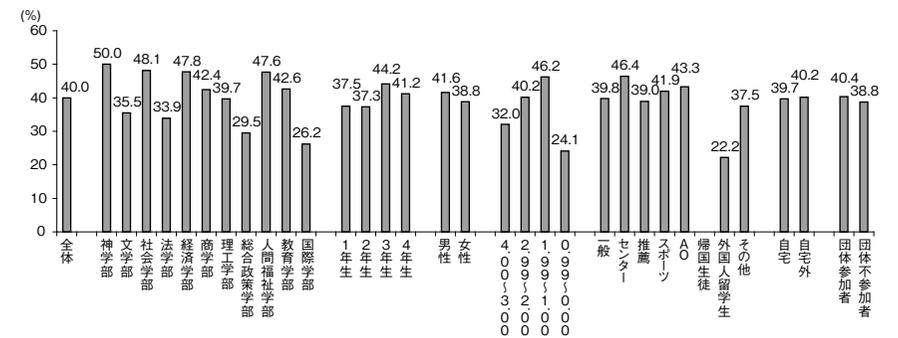


図3-2-8 コミュニケーション能力(Q4)



(3) 在学中にしておきたいこと (Q5)

Q5では、「在学中にしておきたいこと」について、「海外留学」「外国語研修」「資格取得」「ボランティア活動」「インターンシップ」「クラブ・サークル活動」「友人を作る」「その他」から2つまで選択してもらった。

図3-3-1～図3-3-5に選択の割合を全体と学部、男女、GPA、団体参加別に示す。

多い順に「資格取得」(49.6%)「友人を作る」(36.7%)「クラブ・サークル活動」(35.5%)「海外留学」(24.3%)となっており、少なかったのは「インターンシップ」(11.3%)「外国語研修」(11.5%)「ボランティア活動」(15.9%)であった。

学部別では、全体では「資格取得」が最も多いなか国際学部では、「海外留学」が最も多く、75.6%だった。国際以外の学部では、「資格取得」が多い順に教育学部(62.3%)、人間福祉学部(57.1%)、文学部(55.8%)となっており、各学部の教育課程によって取得できる資格を視野に入れて回答した結果と推測できる。国際学部では突出した結果となったが、原則として在学中に全員が海外留学に参加するカリキュラムになっていることが起因している。国際学部の場合は、学生の入学動機そのものに異文化理解や国際的感覚の習得が含まれ、その延長上に海外留学にあるからであろう。

男女別では、男性は「資格取得」(43.4%)が最も多く、次いで「友人を作る」(42.9%)「クラブ・サークル活動」(41.6%)「海外留学」(20.0%)となった。女性は「資格取得」(54.2%)「友人を作る」(32.2%)「クラブ・サークル活動」(31.2%)「海外留学」(27.3%)の順となり、最も多かった「資格取得」については、女性が男性のそれと比較すると10.8ポイント高い。

GPAの4段階別では、「資格取得」についてGPAの高い層から、57.1%、50.9%、43.1%、43.3%であるのに対し、「友人を作る」は、同じく高い層から、30.8%、36.9%、37.2%、63.3%と目立った特徴が表れている。GPAの高いほど「資格取得」を目指す学生が多く、GPAが低くなるに従って「友人を作る」が多くなる傾向にある。

学内外のクラブ・サークルや団体への所属有無別では、所属している学生は「クラブ・サークル活動」(47.1%)「資格取得」(45.0%)「友人を作る」(33.9%)の順となった。一方、所属していない学生は「資格取得」(61.9%)「友人を作る」(44.3%)「海外留学」(24.7%)となった。なお、住居別、入試形態別については、紙幅の関係上省いた。

Q5. あなたが在学中にしておきたいことを2つ以内で選んで○印を付けてください。

1 海外留学	2 外国語研修	3 資格取得
4 ボランティア活動	5 インターンシップ	6 クラブ・サークル活動
7 友人を作る	8 その他 ()	

図3-3-1 在学中にしておきたいこと (全体) (Q5)

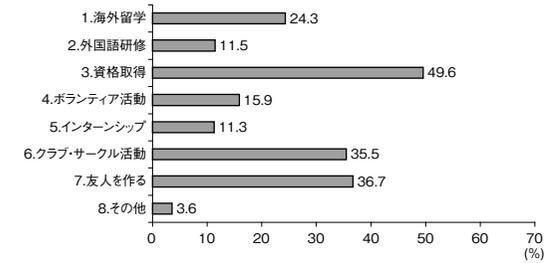


図3-3-3 男女別在学中にしておきたいこと (Q5)

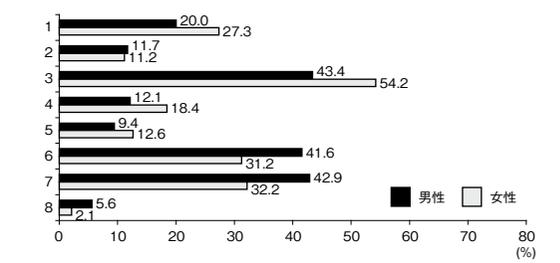


図3-3-2 学部別在学中にしておきたいこと (Q5)

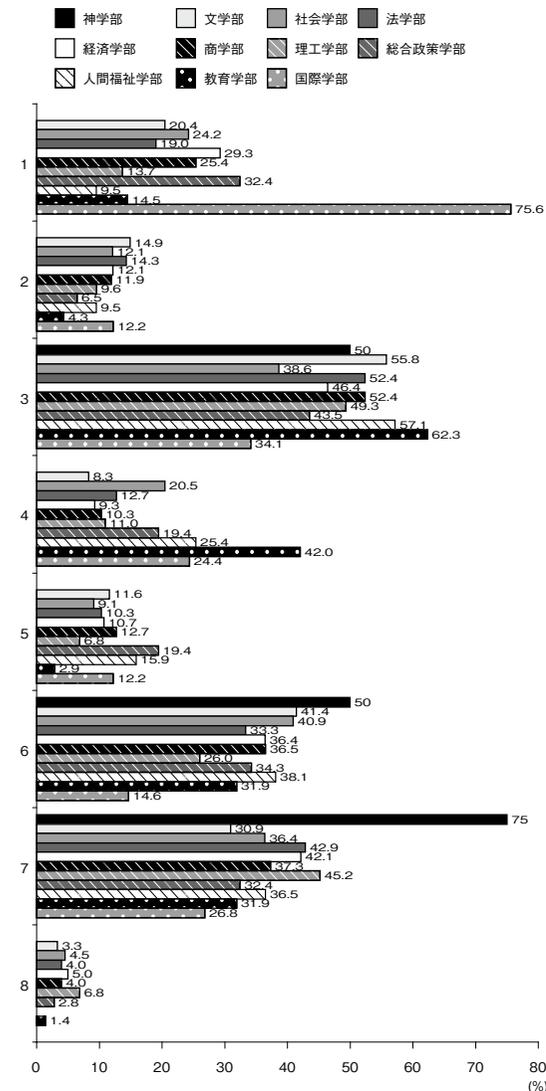


図3-3-4 GPA別在学中にしておきたいこと (Q5)

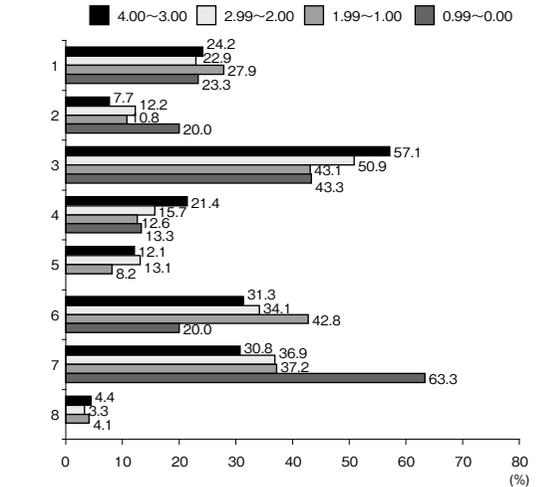
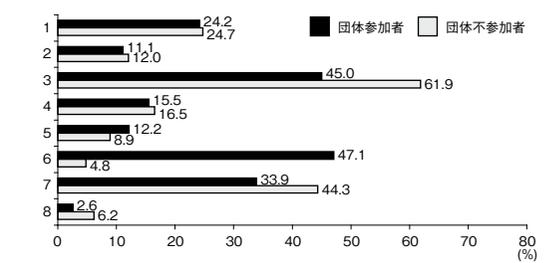


図3-3-5 団体参加別在学中にしておきたいこと (Q5)



(4) 海外留学の経験・期間 (Q21)

1. 留学経験に関して (Q21-1)

「あなたは海外留学したことがありますか」という質問に対する回答結果が図3-4-1である。1,096人中203人(18.5%)が「ある」と答えている。このほかに「計画している」が105人(9.6%)おり、合わせると28.1%となる。この「ある」を学部別にみると、回答者の比率では、留学を必須化している国際学部が62.8%と飛び抜けており、続いて総合政策学部22.5%、文学部21.1%の順となっている。しかし、留学については、回答者の比率ではなく、留学者数の実績で比較したい。実数の多い順に並べると、文学部39人(21.1%)、国際学部27人(62.8%)、総合政策学部25人(22.5%)、社会学部23人(16.5%)、経済学部22人(15.7%)、商学部21人(16.2%)、法学部19人(14.7%)、教育学部11人(15.5%)、人間福祉学部9人(13.4%)、理工学部5人(6.7%)、神学部0人(0%)となっている。また学年別では、3年生68人(27.9%)、4年生62人(20.8%)、2年生36人(14.5%)、1年生36人(11.8%)となっている。今回の質問では大学入学後の留学経験という限定がないため、1年生では入学前の経験が含まれている可能性があるが、いずれにせよ今回の結果が4年生ではなく3年生が一番多いという点に注目する必要がある。この3年生は国際学部が創設された年に入学した学年である。男女別では、女性24.7%(635人中157人)が男性9.8%(459人中45人)を実数で3倍以上、比率で14.9ポイントと大きく上回っている点も注目すべきである。GPA別では、2.0以上3.0未満の層が116人(19.5%)と最も多く、続いて1.0以上2.0未満が51人(18.1%)となっており、3.0以上30人(16.3%)、1.0未満4人(13.3%)の順となっており、GPAの最も高い3.0以上の層の留学が少ないという結果になっている。また入試形態別では、帰国生徒入試66.7%(3人中2人)、外国人留学生入試55.6%(9人中5人)、AO入試31.7%(63人中20人)、その他入試31.3%(32人中10人)が平均の28.1%を上回っており、続いて推薦入試18.1%(375人中68人)、一般入試16.7%(468人中78人)、センター利用入試13.6%(103人中14人)、スポーツ入試9.4%(32人中3人)の順となっている。自宅、自宅外別、クラブ・サークルへの所属の有無に関しては大きな差がみられない。

Q21-1. あなたは海外留学したことがありますか。

1 ある 2 計画している 3 ない

2. 留学期間に関して (Q21-2)

「留学したことがある」「留学を計画している」人を対象として、留学期間をたずねた結果を図3-4-2に示す。回答者304人中1ヶ月以内(以下「短期」)が177人(58.2%)で最も多く、次いで3ヶ月程度(以下「中期」)が66人(21.7%)、6ヶ月以上1年未満(以下「長期」)35人(11.5%)、1年以上26人(8.6%)となっている。「1年以上」の26人は制度上ダブルディグリーの学生のみが対象となるので、実態は計画中の者がほとんどだと推測される。

「短期」では全体の平均58.2%より高い学部は、理工学部88.9%(8人)、教育学部71.4%(10

人)、法学部71.0%(22人)、文学部69.6%(39人)、経済学部68.6%(24人)、社会学部64.7%(22人)、商学部64.5%(20人)で、平均より低い学部が人間福祉学部47.1%(8人)、総合政策学部44.4%(16人)、国際学部17.9%(7人)、神学部0人となっている。

「中期」では、全体平均21.7%より高い学部が国際学部48.7%(19人)、総合政策学部33.3%(12人)、人間福祉学部29.4%(5人)で、平均より低い学部が教育学部21.4%(3人)、法学部16.1%(5人)、文学部16.1%(9人)の順となっている。

「長期」では、全体平均11.5%より高い学部が、商学部19.4%(6人)、国際学部15.4%(6人)、社会学部14.7%(5人)、総合政策学部13.9%(5人)で、平均より低い学部が理工学部11.1%(1人)、文学部10.7%(6人)の順となっている。また「1年間以上」では、全体平均8.6%より高い学部が、国際学部17.9%(7人)、人間福祉学部17.6%(3人)、経済学部11.4%(4人)で、平均より低い学部が総合政策学部8.3%(3人)という順となっている。これらは計画中のものが含まれているため、実際に留学した実績とは異なって、希望が含まれていることを理解しておくべきである。これらの留学期間の結果から学部間の特徴を挙げると、全体として「短期」では、理工学部、教育学部、法学部の希望者が多く、「中期」では、国際学部、総合政策学部、人間福祉学部に希望者が多い。また「長期」では商学部、国際学部、社会学部に希望が多く、1年以上では国際学部、人間福祉学部、経済学部に希望者が多い結果となっている。いずれの学部も「短期」の希望者が多いが、唯一国際学部は、「中期」の希望者が最も多い点が他の学部と大きく異なっている。

学年別にみると、3年生に特徴があり、全学年の平均は、短期58.1%、中期21.8%、長期11.6%、1年以上8.6%であるが、3年生は中期の比率が29.9%と全体平均より8.1ポイントより高く、一方で短期54.5%、長期7.8%、1年間以上7.8%と全体平均より低い点である。3年生は国際学部が創設された年に入学した学年であり、この年に中期留学の制度のプログラムが拡大されたことに影響を受けていると考えられる。全体として学年が下がるとともに短期から中期、長期への留学者の構成比も高まり、また留学者の数も2年生を除き増加傾向にある。男女別の短期、中期、長期の比率では、全体として女性が男性を上回っているが、1年以上の期間では、唯一男性が女性を上回っている。GPAや入学形態と各留学期間との関係は、全体の傾向と大きな差異はない。また自宅・自宅外、サークル・クラブへの所属の有無による違いについても大きな特質は、みられなかった。

Q21-2. Q21-1で1、もしくは、2と答えた方にお尋ねします。留学期間をお答えください。

1 1ヶ月以内で長期休暇期間中 2 3ヶ月程度で1学期期間内
3 6ヶ月以上1年未満 4 1年以上

図3-4-1 海外留学の経験 (Q21-1)

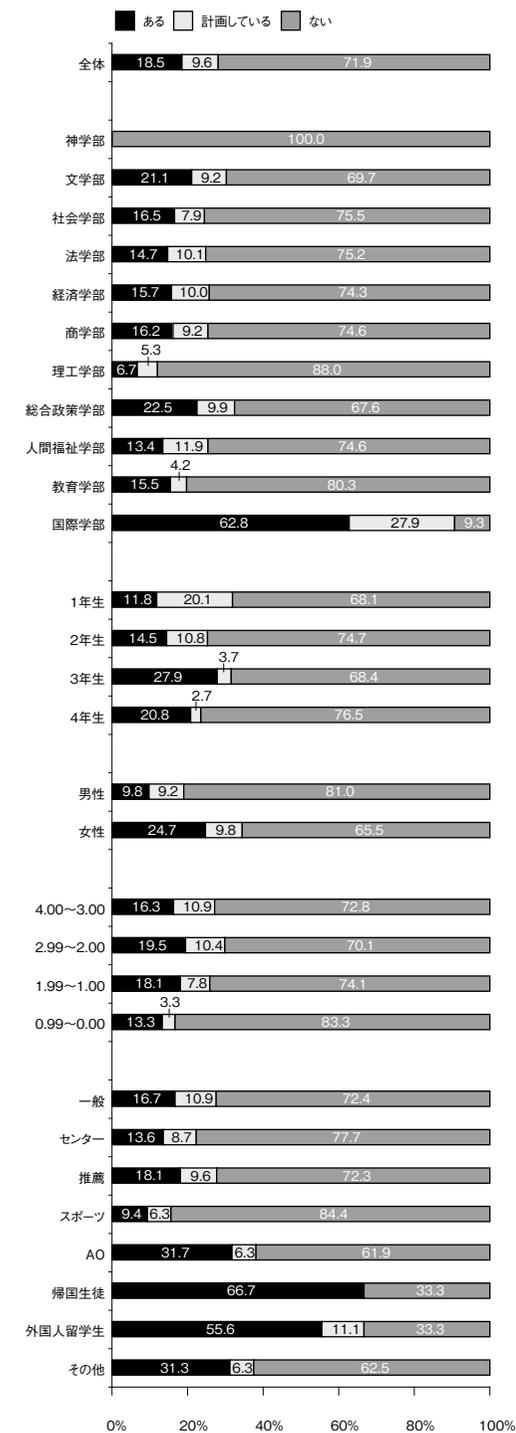
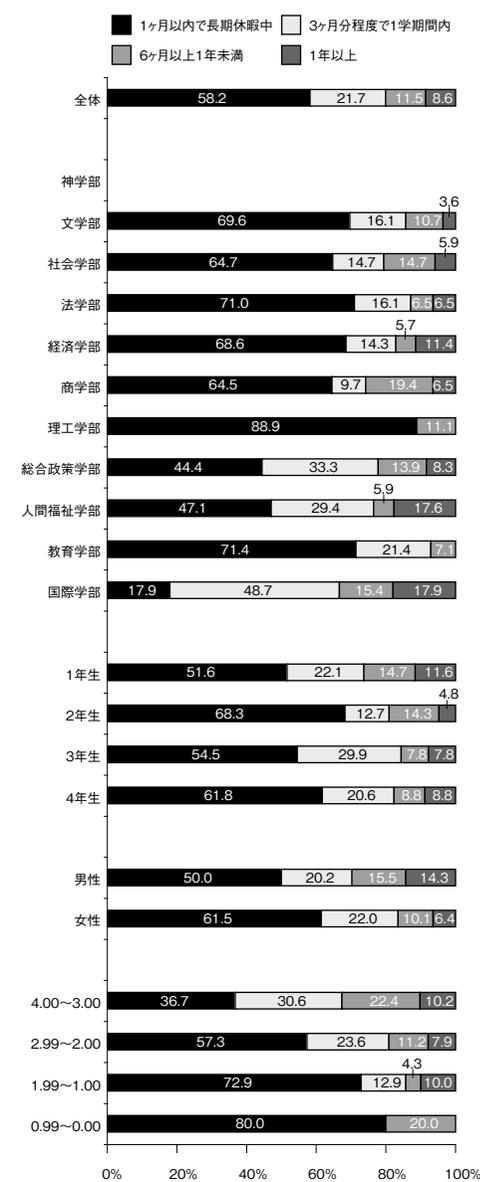


図3-4-2 留学期間 (Q21-2)



(5) 重視する暮らし方 (Q16)

Q16は、「次にあげる暮らし方のうち、あなたが重視する順に3つ回答欄に書いてください。」という設問であり、提示した選択肢は以下の9項目である。

「1.経済的により豊かな暮らしをめざす (<経済的豊かさ>と略す、以下同様)」、「2.地位と名誉を手に入れたい<地位と名誉>」、「3.有名になりたい<有名>」、「4.社会の役に立つような事をする<社会的貢献>」、「5.自分の技能や能力を伸ばしていく<技能や能力>」、「6.家族や友人といった人間関係を大切にしていく<人間関係>」、「7.心と体の健康を大切にする<心身の健康>」、「8.あくせくせずに、のんきにクヨクヨしないで暮らす<のんきに>」、「9.その他」

図3-5-1は、第1位に挙げられた割合であり、最も高かったのが「人間関係」の36.0%である。過去の調査では増加傾向にあったが、直近3回の調査では、第14回は39.1%、第15回は42.1%、第16回は38.5%と減少している。2番目に選択率が高かったのは「経済的豊かさ」の18.9%である。順位は前回と同様であるが、2.0ポイント減少している。3番目は「社会的貢献」13.7%で、前回調査より4.0ポイント増加し、順位は前回の5番目から繰り上がった。4番目「技能や能力」12.0%、5番目「心身の健康」11.6%は前回とほぼ同様の選択率だが、順位は繰り下がった。6番目以下は「のんきに」3.8%、「地位と名誉」1.8%であり順位に変動はなく、選択率もほぼ前回同様である。8番目「その他」1.1%、9番目「有名」1.0%は僅差であるが、前回とは順位が入れ替わった。

次に、回答者が1位に挙げた項目に関して、学部別、学年別、男女別、入試形態別、住居形態別、団体への参加状況別に見る。なお、入試形態別集計は今回調査から取り入れた。

学部別では、図3-5-2で見ると、国際学部、法学部、経済学部においては「人間関係」が全体平均36.0%より低く、逆に「経済的豊かさ」が全体平均18.9%より大きく高く、両者の差がほぼ同率もしくは僅差に迫っている。

学年別でも、図3-5-3のとおり、すべての学年で「人間関係」の選択率が最も高い。2番目に選択率が高い「経済的豊かさ」は1年生 (21.7%) から4年生 (14.1%) への学年進行と共に減少し、逆に4年生では、「社会的貢献」の選択率が1年生 (9.9%) から4年生 (19.8%) と学年進行と共に増加している。入学後の学生の変化として注目し値する。

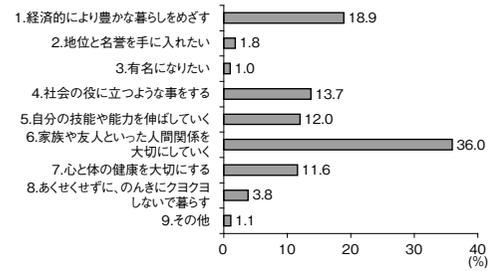
男女別に見ても、図3-5-4 「人間関係」は男女共に最も重視しているが、女性では42.1%と高く、男性は2番目の「経済的豊かさ」とあまり差はなく、男性は「経済的豊かさ」を重視している。

入試形態別では、図3-5-5のとおり、「外国人留学生入試」入学者が1位に挙げた項目が「経済的豊かさ」40.0%、「技能や能力」30.0%、「心身の健康」30.0%であるが、他の入試ではすべて、「人間関係」、「経済的豊かさ」の順となっている。「スポーツ能力に優れた者を対象とした入学試験、または特別選抜入学試験 (スポーツ活動)」入学者は56.3%と半数以上が「人間関係」を最も重視している。

住居形態別では、自宅、自宅外の選択項目の順位に違いは見られない。

団体への参加状況別においても、団体参加者、不参加者の選択項目の順位に違いは見られない。

図3-5-1 重視する暮らし方:1位 (Q16)



Q16. 次にあげる暮らし方のうち、あなたが重視する順に3つ回答欄に書いてください。

- 1 経済的に豊かな暮らしをめざす
 - 2 地位と名誉を手に入れたい
 - 3 有名になりたい
 - 4 社会の役に立つような事をする
 - 5 自分の技能や能力を伸ばしていく
 - 6 家族や友人といった人間関係を大切にしておく
 - 7 心と体の健康を大切にする
 - 8 あくせくせずに、のんきにクヨクヨしないで暮らす
 - 9 その他 ()
- 第1位 []
 第2位 []
 第3位 []

図3-5-2 学部別重視する暮らし方 (Q16)

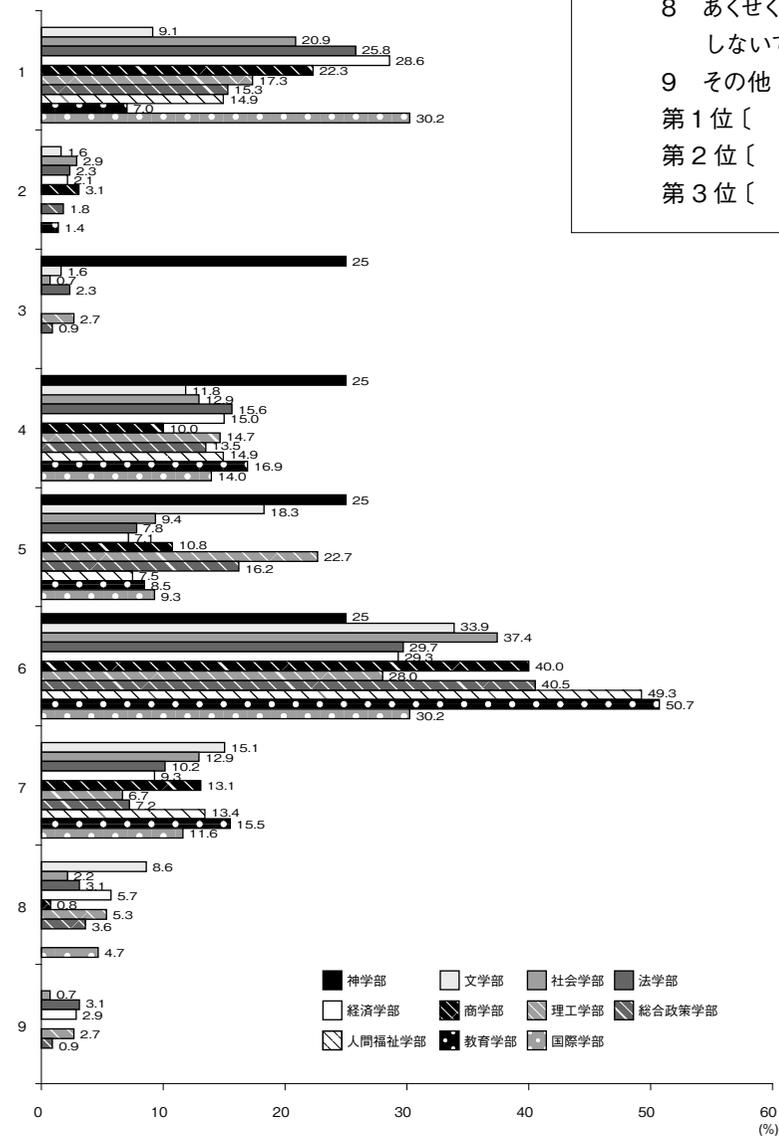


図3-5-3 学年別重視する暮らし方 (Q16)

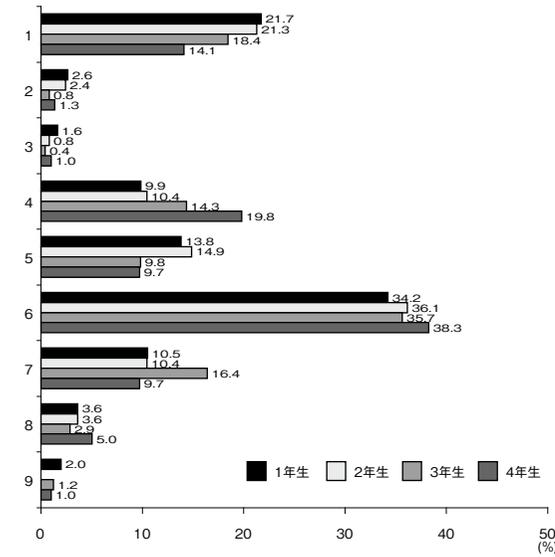


図3-5-4 男女別重視する暮らし方 (Q16)

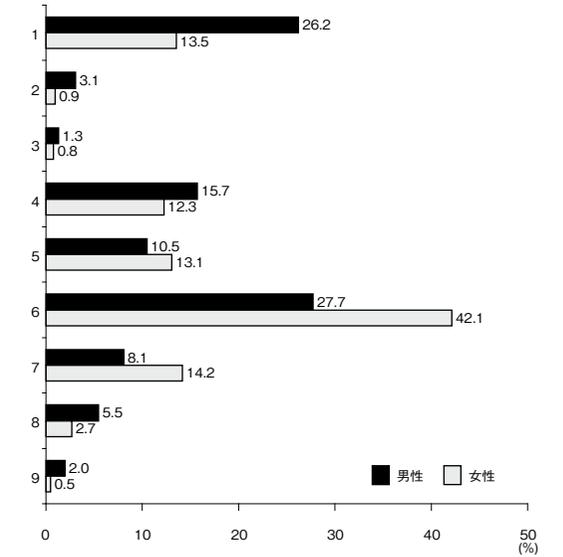
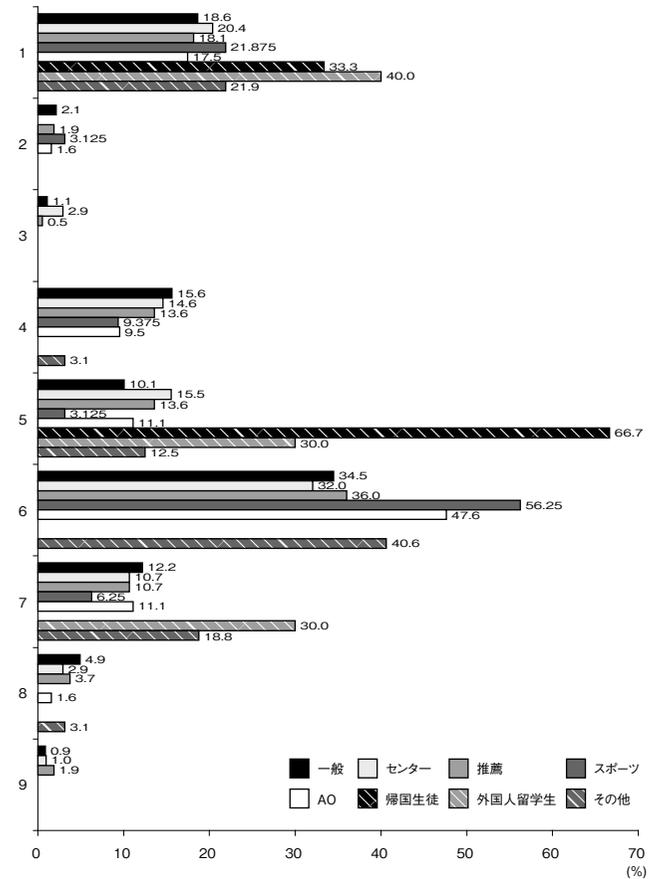


図3-5-5 入試形態別重視する暮らし方 (Q16)



(6) 大学生活への心理的不適応 (Q13)

Q13 においては、「特別な理由もなく時々大学を休みたくなる」や「必要な授業だと思っているのに、どうも足が向かない」などの15の短文を示し、この内容に対して「はい」か「いいえ」で回答してもらい、その結果から回答者の大学生活に対する心理的不適応の状態を見ようとするものである。得点の分布可能範囲は0～15点で、肯定的な内容の短文は逆転項目とし、得点の高いものほど不適応の度合いが高いことを表すようになっている。なお、この尺度は信頼性・妥当性が確認されたものではなく、尺度として十分に完成されたものでもないことを先に断っておく。

図3-6-1は心理的不適応得点の全体分布を示したものである。最頻値は前回の第16回調査(2010年度実施)と同様5点であるのに対し、全体の平均は前回より0.5ポイント低い5.1点である。分布から見ると前回調査では最頻値の5以下の得点への分布が約50%であったのに対して今回の調査では60.8%と、分布が0よりに変化した結果が平均点の低下に現れている。図3-6-2は、これまでの調査全体を通じたこの項目の推移を示している。この項目が採用された第2回調査(1979年度実施)以降平均値は上昇し続け、第9回、第10回調査(1995・1998年度実施)の6.7をピークに以降第14回調査(2006年度実施)の5.5まで下がり、以降第16回調査まで横ばいであったのが今回はまたさらに低くなった。この項目は、得点が低いほどより好ましい結果(不適応でない)である。しかし、本調査におけるこの得点の低下から本学の学生の不適応が少なくなっているという判断には慎重な考慮を要する。図3-6-3は、心理的不適応の平均値を全体、学部別、学年別、男女別、住居別、団体参加者・不参加者別に見たものである。

まず学部別では全体平均の5.1より平均が低いのは文学部(4.8)、商学部(4.9)、人間福祉学部(4.9)、教育学部(4.4)となり、まだ学年がそろっていない新設の国際学部の平均は3.9と平均より1.2ポイントも低い。前回の結果と同様に比較的新しい学部で不適応が少ない結果となった。前回1番得点の高かった法、経、理工の3学部のうち法学部は平均が1ポイント減って5.2、4番目に、理工学部と経済学部も平均は減ったものの相対的には他学部より不適応点が高い結果となった。統計的にこの2学部は、教育学部、国際学部よりも有意に高い得

Q13. 次の文章を読み、あなたの現在の学生生活を念頭に置いて、右側の回答欄に○印を付けて答えてください。「はい」、「いいえ」のいずれにも答えられない場合でも、どちらかというと思う方に答えてください。

- 1 特別な理由もなく時々大学を休みたくなる
 - 2 自分の尊敬する先生がいる
 - 3 学校(授業)に遅刻・欠席することが多い
 - 4 大学や研究室にいるよりも家や下宿にいる方が好きだ
 - 5 学校生活の中でリーダーとして行動することが多い
 - 6 今、所属している学部学科は自分にあっている
 - 7 必修単位を落とすことがしばしばだ
 - 8 学友たちと楽しくやっている
 - 9 病気で大学を休みがちだ
 - 10 必要な授業だと思っているのに、どうも足が向かない
 - 11 自分をよく知ってくれている先生がいる
 - 12 授業がむずかしすぎる
 - 13 大学や研究室に出かけても何となく手持ちぶさたである
 - 14 めんどうな勉強には根気がつつかない
 - 15 他の大学や別の学部・学科にかわりたいと思うことがある
- はい いいえ

点となった(p<.05, 以下有意水準を0.5とする)。

学年別の傾向では、学年が上がるにつれて不適応得点が低くなるというのは前回と同様の傾向であった。今回は特に4年生の得点が低く、統計的には1年生、2年生より有意に高い結果となっている。

男女別では、前回同様女性(5.0)より男性(5.2)の不適応得点が高くなっているが、統計的には有意では無い。

住居別では、前は住居別での差は見られなかったが、今回は自宅外生の得点(5.4)が自宅生(4.9)より統計的に有意に高い結果となった。

最後に団体参加者と団体不参加者については、前回と同様に団体参加者4.9、不参加者5.5と団体参加者に比べ団体不参加者の方の不適応得点が高く、統計的にも有意であった。

図3-6-1 大学生活への心理的不適応 得点部分布 (Q13)

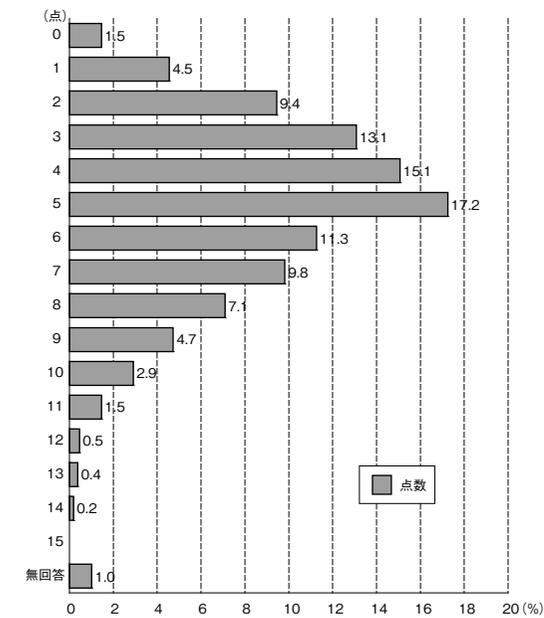


図3-6-3 大学生活への心理的不適応 得点(平均値) (Q13)

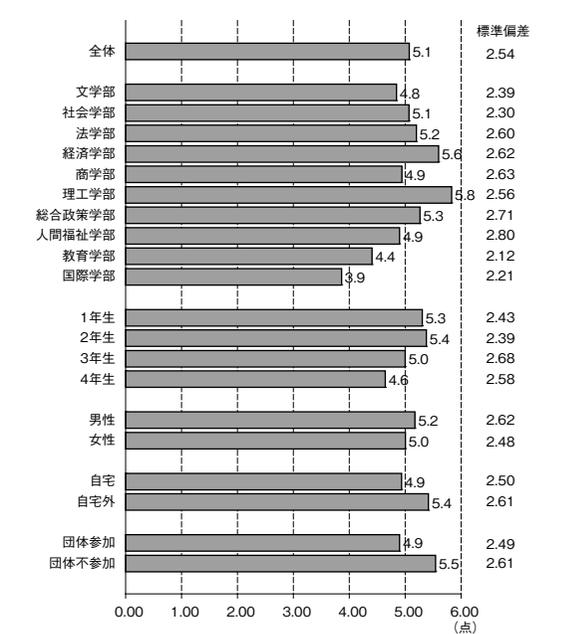
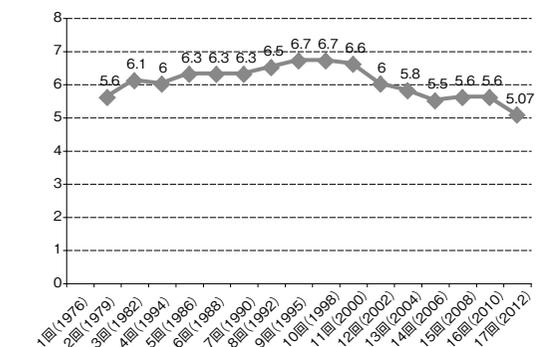


図3-6-2 大学生活への心理的不適応尺度 (Q13)



目的意識・価値観および適応のまとめ

スクールモットー・使命の認知・理解度(Q8)では、本学の“Mastery for Service”について尋ねている。この調査項目で「よく理解している」27.7%、「まあまあ理解している」56.6%となっており、合わせると8割以上が理解しているという結果が出た。その中でも新しく設置された国際学部、教育学部での理解度が高い。これは教職員による貢献が奏功しているのではないかと考えられる。男女別では女性が僅かに男性を上回っている。入試形態別では、スポーツ能力に優れた者を対象とした入試や特別選抜(スポーツ活動)による入学生の理解度が際立って高い。また関西学院が「“Mastery for Service”を体現する世界市民」の育成を使命としていることを知っているかの質問項目では、全体で78.6%が「知っている」と回答しており、認知度の高さを示している。特に国際学部では「知っている」が100%であったが、理工学部では「知らない」が37.8%もあった。また帰国生徒入試で入学した学生3名の回答者では1名のみしか知っていないという結果が出ている。実人数が少ないがこのような各種入試こそが本学のスクールモットーを周知する機会であると考えれば、認知度は100%であってもよいと考えられる。

在学中に身につけたい知識や能力(Q4)では、2つまでの選択の結果、最も割合が高かったのは「一般的な教養」(44.1%)、次いで「専門知識」(41.7%)、「プレゼンテーション能力」(40.0%)、「外国語運用能力」(33.3%)の順であった。なお、「ディベート能力」「ITスキル」「コミュニケーション能力」はいずれも一桁台の少ない数値であった。

学部別では、それぞれの項目の第2位までをあげると「一般的な教養」では文学部55.2%、教育学部54.4%の順に、「専門知識」では、教育学部69.1%、理工学部58.9%の順に、「外国語運用能力」では、国際学部81.0%、総合政策学部41.0%の順に、「ITスキル」では、経済学部8.2%、総合政策学部7.6%の順に、「プレゼンテーション能力」では、総合政策学部43.8%、経済学部26.9%の順に、「ディベート能力」では、法学部14.9%、経済学部10.4%の順、「コミュニケーション能力」では、神学部50%は参考にとどめるとして、社会学部48.1%、経済学部47.8%の順となっている。それぞれ学部教育の特徴が反映された結果と考えられる。

学年別では、「一般的な教養」と「外国語運用能力」に特徴が表れており、一般教養は学年の高い3・4年生が高く、外国語運用能力では、1・2年生が高い。これは学年進行に合わせたカリキュラムがそこに関心がいくようになっていっているからであろう。

男女別の回答率では、男性が「専門知識」(45.4%)と「コミュニケーション能力」(41.6%)で女性のそれより上回ったが、一方で女性は「一般的な教養」(46.0%)と「外国語運用能力」(36.2%)で男性のそれより上回っている。

GPAでは、3.0以上と1.0未満に特徴があり、両者は「一般的な教養」(48.6%と48.3%)「専門知識」(53.0%と48.3%)で他より高く、「プレゼンテーション」(16.0%と10.3%)「コミュニケーション能力」(32.0%と24.1%)で他より低い結果となっている。また1.0未満では、「ITスキル」(17.2%)が飛びぬけて高い結果となっている。その他の入試形態別、自宅・自宅外別、団体所属別は省略する。

在学中にしておきたいこと(Q5)では、2つまでの選択の結果、全体で多い順に、「資格取

得」(49.6%)、次いで「友人を作る」(36.7%)、「クラブ・サークル活動」(35.5%)、「海外留学」(24.3%)、「ボランティア活動」(15.9%)、「外国語研修」(11.5%)、「インターンシップ」(11.3%)という順であった。

これを学部別にみると、「資格取得」では、多い順に教育学部(62.3%)、人間福祉学部(57.1%)、文学部(55.8%)となっており、これらの学部は当該学部の教育課程によって取得できる資格を視野に入れて回答した結果と推測できる。また「留学」では、国際学部(75.6%)、総合政策学部(32.4%)、経済学部(29.3%)と国際学部が飛びぬけて多い結果となっている。学生の入学動機、そして入学後のカリキュラムから当然の結果だと思われる。

性別では、男性は「クラブ・サークル活動」(男性41.6%、女性31.2%)と「友人作り」(男性42.9%、女性32.2%)で女性より割合が高く、女性は「資格取得」(女性54.2%、男性43.4%)と「海外留学」(女性27.3%、男性20.0%)で男性のそれらより割合が高い。GPAの4段階では、「資格取得」でみてみると、最もGPAの高い3.0以上の層が一番高く、次に3.0未満2.0以上で、2.0未満1.0と1.0未満がほぼ同じ値で低い結果となっている。また1.0未満の層では、「友人作り」が飛びぬけて高い割合となっている。その他の入試形態別、自宅・自宅外別、団体所属別については省略する。

海外留学の経験・期間(Q21-1、2)では、「あなたは海外留学したことがありますか」という質問で18.5%(203人)が「ある」という回答をしている。そのほかに計画中が9.6%(105人)おり、合わせると3割弱(308人)となる。学部別では、最も多いのが国際学部62.8%(27人)、次いで総合政策学部22.5%(25人)となっている。また実数では、文学部21.1%(39人)が最も多い数である。学年別では3年生(68人)が最も多く、男女別では女性24.7%(157人)が男性9.8%(45人)の3倍強となっている。GPA別では、4段階で上から2段階目の層が最も多く、次いで3段階目の層、そして最もGPAの高い層の順となっている。最もGPAの高い層に留学経験者が少ないという結果が若者の内向き志向といわれるイメージに合致するところともいえる。入試形態別では、帰国生徒入試66.7%(2人)、外国人留学生入試55.6%(5人)で入学した学生は、当然のことながら留学経験の数値が最も高く、一方スポーツ入試の入学者9.4%(3人)が最も低い結果となっている。なお、実人数では一般入試78人が最も多い。

留学期間を尋ねた結果、短期(1ヶ月以内、外国語研修等)が304人中177人(58.2%)、中期(3ヶ月程度、中期留学)が66人(21.7%)、長期(1年未満、交換留学)が35人(11.5%)、1年以上(ダブルディグリー等のケース)が26人(8.6%)であった。学年別に見ると、3年生は全体と比較して中期の比率が約3割(29.9%)と高いのが特徴となっている。現3年生は、国際学部が創設された時に入学した学生で、その年に中期留学のプログラムが拡大されたことが影響したと考えられる。また留学生数も現在の2年生を除き学年が下がるにしたがって中期、長期留学の構成比率が高まっている。男女別では、女性の比率が男性を上回るが、1年以上の期間では男性が女性を上回っている。なお、自宅・自宅外、サークル・クラブへの所属の有無による特質は特にない。

重視する暮らし方(Q16)では、9項目から3つ選択した結果、最も割合が高かったのは、「人間関係」(36.1%)で、次いで「経済的豊かさ」(18.8%)、「社会貢献」(13.6%)、「技能や能力」(12.1%)、「心身の健康」(11.6%)、「のんき」(3.8%)、「地位と名誉」(1.8%)、「その他」(1.1%)、「有名」(1.0%)の

順であった。経年比較では、第1位の「人間関係」は、過去3回その比率は毎年低下している。また第2位の「経済的豊かさ」も前回よりも2.1ポイント減少し、低下した。一方、第3位の「社会貢献」は前回より3.9ポイント増加し、前回5位から3位へと繰り上がった。学年別にみると1年生から4年生まですべての学年では「人間関係」の選択率が最も高い。2位の「経済的豊かさ」では、1年生(21.7%)から4年生(14.1%)への学年進行と共に選択率が低くなり、逆に「社会貢献」では、1年生(9.9%)から4年生(19.8%)と学年進行と共に選択率が高くなっているのは、入学後の変化として注目に値する。入試形態別では、外国人留学生入試の入学者では、1位「経済的豊かさ」(40.0%)次いで「技能や能力」(30.0%)「心身の健康」(30.0%)の順となっているのは、そのほかの入試では全体の傾向と同じ順である。スポーツ能力に優れた者を対象とした入試、特別選抜入試(スポーツ活動)の入学者では、「人間関係」(56.3%)と高い比率で選択しているところが特徴である。

大学生活への心理的不適応(Q13)では、「特別な理由もなく時々学校を休みたくなる」や「必要な授業だと思っているのに、どうも足が向かない」など15の短文を示し、この内容に対して「はい」か「いいえ」の回答をしてもらった。得点の分布可能範囲は0～15点で、得点が高いほど不適応の度合いが高いことを表わす。全体の平均値は、5.1であった。

学部別では、社会学部が5.1で平均値であり、平均値より低いのは、文学部(4.8)、商学部(4.9)、人間福祉学部(4.9)、教育学部(4.4)、国際学部(3.9)であり、比較的新しく開設された教育学部、国際学部で健康度が高い結果となった。逆に平均値より高いのが、理工学部(5.8)、経済学部(5.6)、総合政策学部(5.3)、法学部(5.2)であった。

学年別の傾向では、前回同様に学年が上がるに従い不適応得点が下がる傾向にあるが、今回は2年生が1年生よりも若干高くなっている。

男女別では、前回同様女性(5.0)より男性(5.2)の不適応点が高くなっている。

住居別では、今回は自宅外生(5.4)が自宅生(4.9)より高い結果となった。(前回は両者の差が全く見られなかった)。

団体参加別では、団体参加者(4.9)より団体不参加者(5.5)の不適応点が高かった。前回と同様の結果となった。

最後に全体として今後とも各項目の傾向や変化を見逃さないように注意深く見ていく事が大切であるが、今回の調査結果の中では、学年別では、3年生、男女別では女性、GPAでは2番目(2.00～3.00)の層に特徴が現れていると感じた。これらからは時代の先取りの兆候、次に起こってくる現象の前触れといった特徴を見ることが出来る。特に就職活動が始まる前の3年生に注目して分析していくことが必要であると思われる。

4. 大学施設

(1) アメニティ(Q24)

学内のアメニティ(生活環境の快適さ)を調査するため、教室、食堂、トイレについて、それぞれ5段階(とても快適、まあまあ快適、普通、あまり快適と思えない、不快)で評価をしてもらった。その結果は以下の通りであった。

①教室について

教室についての回答結果を図4-1-1に示す。キャンパスの快適さ(教室部門)では、全体で64.7%が「とても快適+まあまあ快適」(以下「満足」)と回答している。逆に「不快+あまり快適と思えない」(以下「不満足」)と回答した学生が6.5%で、「普通」28.7%であった。おおむね教室(授業・学習)環境については、満足できていると推察される。

これを学部別にみると、満足の多い順位では、神学部(100%、但し、回答者4名)、国際学部(86.1%)、人間福祉学部(85.1%)、文学部(72.9%)、社会学部(71.1%)、総合政策学部(70.3%)、教育学部(60.5%)、法学部(56.6%)、経済学部(56.4%)、商学部(51.6%)、理工学部(48.0%)で平均は64.7%となっている。神学部は回答者が少ないので対象外として、国際学部、人間福祉学部は、西宮上ヶ原キャンパスで最も新しいG号館を使用することが多いため比較的快適という結果となっていると推測する。しかし学内で最も古い建物の1つである文学部で72.9%となっている。

また、神戸三田キャンパスの比較的新しい理工学部で48.0%となっている。今後その原因はどこにあるのかを究明することが必要である。

これを男女別にみると、男性は57.7%、女性は69.9%が「満足」(とても快適+まあまあ快適)と答えている。結果、男性よりも女性が快適と感じていることになる。

これを学年別にみると、1年生(65.0%)、2年生(62.1%)、3年生(58.2%)と低下し、4年生(71.9%)と逆に高い数値となっている。推測の範囲でしかないが、4年生は平均して授業に出る回数が少なくなっていること、あるいは4年間を振り返って快適さが増してきたという実感からということが考えられる。

その他GPAでみると1.00未満では33.3%となっているが、1.00以上では、全体平均の64.7%とあまり差がみられない。入試形態の違いでは、回答者の少ない外国人留学生入試や帰国生徒入試を除くと違いはみられない、自宅・自宅外においても大きな違いはみられない。団体に入っているかどうかでは、入っている者が「満足」67.1%で、入っていない者が58.3%となっており、入っていない学生の方が教室環境について、よりシビアにみていると推察される。

Q24. あなたは本学のアメニティ(生活環境の快適さ)についてどう感じますか。A 教室、B 食堂、C トイレ、それぞれについて5段階で評価してください。

A 教室
B 食堂
C トイレ

1 不快
2 あまり快適と思えない
3 普通
4 まあまあ快適
5 とても快適